

## ルソーの人間性と教育論

横山ひろみ

ルソーが『エミール』において彼の自然主義教育論を世に問うたのは1761年9月であった。出版までの経緯は『告白』に詳しいが、公刊に至るまでにかなりの曲折があったという。その内容は大きな反響を呼んだ。友人たちからは賛否両論の手紙が寄せられたが署名のないものが多かったという。翌年には早くも『エミール』の焚書が行なわれ、パリ立法院を中心とするルソー弾劾裁判を皮切りにして、彼に対する具体的な迫害が始まった。ついにバスティーユ投獄寸前に彼はほうほうの体で都落ちすることになったのである<sup>(1)</sup>。

何故、『エミール』がこれほどまでに非難を浴びるに至ったのか。恐らくルソー自身は『新エロイズ』以来の称賛を期待していた節があるが、彼の児童教育論は当時の宗教および社会規範からとうてい受け入れがたいものであったのであろう。今日でも欧米では彼の自然主義教育論が確固たる位置を獲得しているとは必ずしもいえないが<sup>(2)</sup>、むしろ、わが国では児童本位の教育論として評価されている。その理由として桑原武夫氏は、大正以後日本にいわゆるリベラリズム教育が広まったとき、その背骨となるべきモラルの手ごろな形が『エミール』にあった、さらに『エミール』のなかでルソーが用いている *vertu*, *pitié* などのシンボルが教育勅語のなかにある「徳」と形の上で同一であることなどを指摘している。<sup>(3)</sup> いずれにせよ、ルソーの教育論はきわめて今日的で合理的な面が多い。18世紀のジェズイット派の古典的なユマニテ教育のなかにあっては異端的なものがあるとしても、当時の進歩的知識人の賛同が、得られる内容であったのである。

社会的な糾弾の原因は、したがってその内容よりもむしろルソー自身の反道徳的な行動にあったと考えられる。それは自らの子を捨て子にした上での子供

の教育論への非難であろう。ルソーが矛盾の人といわれる最も根幹的な行動のひとつがこの実の子の捨て子事件なのである。これについてルソーは最初の捨て子を次のように弁解している。「ひどいめにあわされた正直者，欺かれた夫，誘惑された妻，人目をしのぶ出産，こういったことがここでのごく当たり前の話題であった。そして孤児院にいちばん沢山の子供を送り込んだものがいつもいちばん称賛されていた。こうした空気に私も感染した。まことに愛すべき人々，そして腹の底は実に真面目なこの人々たちの間で行なわれている考えかたにもとづいて，わたしは自分の考えを決めた。そしてこう思った。これがこの国の習慣なのだから，ここに住む以上はそれにしたがっていいはずだ」<sup>(4)</sup>と。二番目の子供も同様に処置された。第三の子供が生まれたときルソーは38才、『学問芸術論』が懸賞当選し有名になりかけていたが，その子供も同様の運命をたどった。「わたしはわが子を自分の手で育てることが出来なかったので彼らの教育を社会施設に託し，将来ごろつきや山師などよりも，労働者か百姓になるようにしておけばそれが市民および父親に相応しい行為を為すことになる」と信じていた。・・・わたしは子供たちのために最善の方法，あるいは自分で最善と信じた方法を選んでやったのである。私自身彼らと同じように育てられたらよかったと思っているし，今でもそう思っている。<sup>(5)</sup>」

合計五人の子供たちはこうして全員孤児院に送られた。ルソーが本気で「この処置はたいへんよく，道理にかなない，また正当である」と考えていたかどうかについて多くの論争があるが，数多くの非難にあって多少は狼狽したとしても，すべての行動を友人達に隠し立てせず，「自己正当化」はしないという彼の主張に立った場合，ルソー自身は予想外に公共的施設あるいはそこでの教育方針（これは明らかにジェズイット派の幼児教育によるものであるが）をかなり信頼していたということがいえよう。

彼の教育論は一種の社会改革を前提にした人間改革を意図したものだという指摘もあるが，とくにそれまで貴族階級の子弟に行なわれてきた教育を根本的に否定しているものではない。何故なら、『新エロイーズ』に満ちている心のこまやかさを感じとるには「上流社会の教育によらねば得られない微妙な感覚

が必要なのだ。』<sup>(6)</sup> から。これらは明らかに『エミール』での主張との間に矛盾がある。いずれにしても、彼の教育論の今日的解釈も、彼の人間性の分析が必要になるようだ。もっとも、ルソーには子供がいなかったとする説<sup>(7)</sup> もあり、「捨て子」の問題についてはまだ検討するべきところは多い。

次にルソーの人間形成に深く関わったとされている彼の持病から、彼の人間性を考察してみよう。

ルソーの病気については実にさまざまな診断名が付けられている。すなわち「被害妄想性鬱病」(mélancolique persécuté), 先天性徘徊癖 (dromomane constitutionnel), 解釈妄想症 (délirant par interprétation), パラノイア (paranoïaque), 早発性破瓜病の兆候による分裂病, (schizophrénie caractérisée par symptômes hébéphréniques précoces, passant dans la forme paranoïde), 解釈症型の毒性による妄想 (délire toxique à forme interprétative), 強迫症とヒステリー型反応を伴う潜在的同性愛 (homo-séxualité latente avec obsessions et réactions hystérisiformes)<sup>(8)</sup> などである。

一人の人間にこれ程の病名がつくとは驚くばかりだが、これが事実だとすると、ルソーは当然、精神分裂病か神経症のいずれかによって精神病棟に拘束されなければならない。当時の精神病の扱い方を考えると、いずれにしてもルソーは終生退院できず病院のなかで一生を終わることになっていたであろう。

それはともかく、自分の病気をどのように意識するかは性格形成に大きな影響を与えるものであるから、この観点から精神病学者などになって『告白』から彼の性格や持病を迫ってみることも重要であろう。

容貌・気質としてルソーは自分自身の容姿についてこう述べている。「あまり背の高くない、身体の格好はまずいい方だ。形のいい足、ほっそりした脛、軽快な態度、生き生きした容貌、可愛いくちもと、黒い髪と眉、目は小さく窪んでいたけれど、血を燃え立たせ火に輝いていた」(16才の半ば、ヴァランス夫人と運命的な出会いをする頃)<sup>(9)</sup> 多分にナルシスト的な意味合いの強い表現だが、彼自身は自分の容姿を大変気に入っていたようだ。ド・ラ・トゥールのえがいた41才ごろの肖像をみても、たしかに美男子で人好きのする人物であつたら

しい。そして女性によくもてた方であった。このことが彼の性格形成に大きく影響を与えた。彼が自覚していた気質についてマゾヒズムがあるが、これは8才のときボセーで従兄のベルナールとともにランベルシエ嬢によって受けた鞭の折檻から始まるという。彼は次のように述べている。「苦痛のうち、恥ずかしさのうちにさえ、一種の肉感が混じっているのを感じて、おなじ手によってもう一度それを味わいたい欲望のほうが恐怖よりも強くなっている。・・早熟な性本能が混じっていたに違いない。」このような早熟な気質を持ちながら、ルソーは「・・この婦人から受けた折檻が、わたしの好みや欲望や情熱、その後のわたしまで、すっかり決定したということ、しかもそれが当然予想されるものと反対の方向をとった、・・感覚は目覚めたけれども、わたしの欲望のほうはうまくだまされて別の方向へ進み、・・どんなに発育の遅い冷やかな気質の人でも一人前になる年頃まで、あらゆる汚れから純潔に身を保つことが出来た」<sup>(10)</sup>という。「結婚期を過ぎてからも、このへんてこな、執拗な、偏執、狂気とっていいほど強くなった好みがやはり残っていて、素行の純潔を失わせそうで、却ってそれを守る結果になった」とも書いている。ヴィクトル・ドモールによればこの性向は、明らかにマゾヒストであることを示すという。<sup>(11)</sup>ラフォルグもフロイドの精神分析学の立場からルソーの行動を分析し、マゾヒズムから露出狂的性倒錯の人格をもつと診断している。<sup>(12)</sup>しかしこのような性的経験は少年期にありがちなもので、必ずしも病的なものとはいえない。ランベルシエ事件にしてもこれはきわめて素朴な子供の接触願望、あるいは少年的エロチスムの一端を示す素朴な物語にすぎないし、その病的なものへの診断は、結局はそれぞれの精神医の専門分野、臨床経験あるいは症例から、そのアナロジーとして提出されているにすぎないのである。<sup>(13)</sup>

持病として『告白』に書かれているルソーの病的な自覚症状には次のようなものがある。

耳鳴り、動悸、不眠症・・三十年来続いている。<sup>(14)</sup>

尿閉症・・出産時より膀胱の構造に欠陥がある。<sup>(15)</sup>

これらに基いて、「病身故に・・」という記述がしばしばでてくる。<sup>(16)</sup> 山の硬

水を多量に飲んだことによって起こった痙攣性の胃炎をきっかけにして、耳鳴りや動悸が生涯続くと書かれている。しかしこれらの症状は通常の生活をすることによって軽快し、とくに学問に熱中することによって苦痛を忘れるというから、現状不満から発生する神経症的なものであったと考えられる。しかし、彼に言わせれば病気自体は一向に良くなるらないのである。

「私の健康は一向に回復しなかった。それどころか目に見えて衰弱していく。死人のように青白く、骸骨のように痩せこけてしまった。脈が激しく、動悸も早くなり、絶えず息が苦しい。ついには衰弱のあまり運動もできぬほどになった。足を早めると息切れがし、腰を屈めるとめまいがする」<sup>(17)</sup>

ルソー24才、自分で死が近いと考え自己教育に専念する頃である。このような自覚症状には憂鬱病が加わっていると彼は自己判断するが、ルソーの医学知識はかなりのものであったようで、すでに放浪時代に医学解剖の手伝いを経験し、自己教育を完全にするために生理学や解剖学の勉強にもとりかかっている。また、後年のことであるが(1759年)リュクサンブール公の痛風を的確に診断している。しかし、自己判断がゆき過ぎて、医学書にある病気を勉強しているうちに、そのひとつひとつに自分の病気の兆候を見いだしては自分にそれが全部揃っているように思い込むのである。やがて、自分の病気の根は心臓の息肉というものだと想像するに至る。「私は情熱に気を奪われて病気のことは忘れていたが、それは気の病ではなかったから、冷静に戻るとすぐに(病気が)感じられた」「医者たちは私の病気がさっぱり判らなかつたらしく気の病にしてしまい・・・」<sup>(18)</sup> これらの記述からすると、精神医たちが、神経症などと診断を下した理由も多少、理解できるのである。

更に、腎臓炎、尿道炎の持病もあったと言う。

このように多くの持病と付き合いねばならなかったルソーであるが、これらの病気は彼の性格形成に大きな影響を与えたのであろうか。私は、それは彼の発達期における自我の形成にそれ程決定的な影響をもたらせたとは考えにくい。もし影響が強ければ『告白』の少年期の部分にもう少し陰鬱な記述があってもよさそうなはずである。しかし現実には「葡萄や果実の収穫の中に、この年の

末も過ぎた。素直な田舎の人に囲まれて、日毎の田園の生活に親しんでいく」<sup>(19)</sup> という文章やエルミタージュの田園生活を賛美する記述をみると、ルソーはむしろ健康で健全な精神の持ち主であったと考えるほうが自然であろう。さらに、ルソーは病気のために読書に積極的に親しむようになった。すでに7才のころから父親と小説や評伝を読み出してから彼の博覧強記が形成されたのであろうが、彼独特の読書法を作って、それを自分のものとした。たとえば、「一人の著者のものを読むときは、自分の思想やその他の著者の思想を持ち込んだり、論争したりしないで、その著者の思想の全部を採用し、それに従うという法則を設ける」とか、「はじめは真偽を問題にせず、明確であればその思想を自分のうちに蓄積することにしよう。そのうちに頭のほうも豊富になって、比較したり、選択したりできるようになるだろう」<sup>(20)</sup> など、この時期における勉強や思考が、彼の教育法の骨子になっているのである。病に苦しんでいるなかで積極的な創造活動を続ける、ルソーの精神力と意志の強さは、いわば天性のものであったと言えよう。

人間ルソーを分析する方法として、シェルドンの体質心理学を基礎におき考察する方法が行われている。すなわち、体型として、内胚葉型、中胚葉型および外胚葉型に分類し、気質型として内蔵型 (viscérotonia)、体組織型 (soma-tonia) および脳型、(cérébrotonia) の三つにわけ、ルソーの作品、ことに自伝的作品、手紙、伝記などから客観的なルソーの人間像を浮かび上がらせようとしたものである。<sup>(21)</sup> その分析の結果によってルソーは、気持ちのよい生活を欲し、だれにでも愛されていたいという欲求をもつ「依存的人間」と、人や物を変革しようとする積極的な意欲を持つ「戦闘的人間」、および敏感な心を持ち孤独や夢想のなかに生きたいと考える「隠退的人間」の、三つに気質を併せもつ人間として表現されている。この試みはかなり成功しているし、この三つの気質がそれぞれ同じような強さでルソーのなかに存在し、ルソーがこのいわば三つの人間の相克に苦しんでいたことが「矛盾せるルソー」の成立につながった、とする分析である。樋口謹一氏らの指摘にもあるごとく、ルソー自身が「混合的気質」と呼ぶ性格が、彼の矛盾した行動の発端となり、社会への

適応を妨げているものであったことは確かであろう。

一方、別の考え方もできよう。つまり、ルソー自身は自分の気質を次のように述べている。『好人物で、他人の過去に対しては極度に寛大だが、他方自尊心が強く故意の侮辱にはがまんができぬということだった。然るべき事柄においては品位と威厳に甘んじること、他人に払うべき敬意を怠らないのと同様に、自分の受くべき敬意についてもなかなかうるさいこと』<sup>(22)</sup>

いささか自己弁解的だが、自分自身が十分意識し、大事にしている「他人への配慮」というものを他の人々が完全に理解していないことに、彼は不満をもち、焦らだちさえ感じていたのである。一般に、男性より女性のほうが繊細な感情を持っているし、他人のそれを理解することに長けている。ルソーはおそらく彼自身の無意識のうちの女性的側面、つまりアニマ的なものを大事にしていたにちがいない。したがってその投影としてそれを所有するか、あるいはそのことに細やかに共感できる女性に自然に惹かれ、慕うようになったのであり、必ずしも依存ということではない。戦闘的人間にしても、ルソーのもつ理想家としての心情が、自分の正義を訴え主張しようとするれば、どうしても戦闘的にならざるをえないし、それが社会に受け入れられなければ、むしろ孤高を保つという、逆説的な態度が隠退的人間としてみられるのである。

以上のことを考えあわせると、ルソーは本質的に純粹で、シャイでそして繊細で、美的自然感情のきわめて強い人間であったといえる。したがって「常に真実であろうとして努力しつづける」ためには、「大胆に、勇猛に、不敵になり、堅固な信念をどこまでも貫き通す」ことが必要であったのである。<sup>(23)</sup>

やがて、ルソーの美的自然への憧憬は、「自然状態にある人々は、善人でも悪人でもなく、悪徳も徳ももたない」<sup>(24)</sup>ものであるという、自然人としての自由な生き方を賛美し、ついに社会によって歪められた人間の改造を目指す自然主義教育論へと発展したのである。したがって、自らの子を孤児院に送ってしまったルソーは自分自身の教育者としての資質に疑いを抱きながらも、その自然賛美の感情の流れるまま、彼の宗教性に深く根ざした厳格な道德観に基いて、その理想の形としての教育の一般理論を作りあげていった。

ルソーにとって教育とは「社会によって歪められていない自然のままの人間 (= 自然人) を作る術であり、社会によって歪められた人間 (= 社会人) を本来の自然のままの人間 (= 自然人) にまで高めることを目的とするもの」であった。<sup>(25)</sup> こうした理念はともかく、ルソーは自分自身は教育の実践者として性格的にも不適格であると考えていた。彼の教育経験は、リヨンのマブリ家での8才と9才 (実際は5才半) の二人の子供の家庭教師が最初であったが、ここでルソーは、教師の適性とは単なる知識や能力ばかりでないことを思い知らされるのである。彼自身が性格的に「むらがあり、とくに慎重さに欠けている」ことによって「感情とか、理屈とか、癩癩という子供に対してはつねに無益で、しばしば有害である」<sup>(26)</sup> 方法しか使えず、こどもたちの反逆の前にあえなく敗北してしまったのである。(この経験によって、『サント・マリのための教育案』が書かれた)

それでも彼の教育に対する情熱は止みがたかった。おそらく彼自身が正規の教育を受けておらず、殆どが独学で積み上げたものばかりであったことに、深い反省と悔いがあったに違いない。このことに関連して、彼は次のように言う。「語学 (ラテン語) をやったのは、ただ記憶力を鍛えるためだった。だが、結局は辞書を片手に易しい作家のものなら読みこなせる程度になった。このやり方でかなり上手くなった。翻訳にも力を入れたが、これは書くのではなく、頭のなかでやったのでその程度にとどまった。…ついに、しゃべったり書いたりするところまではいかなかった。…こうした学習法から生ずるもうひとつの欠陥は韻律法を知らずじまいになったことで、作詩法にいたってはなおさらだった。にもかかわらず、ラテン語の詩や散文の音の美しさを味わいたいと思っておおいに努力もした。しかし先生に就かねばそれも無理だと思う。…とにかく、独学には利点もあるがまた大きな欠点もあり、何よりもその苦労は並大抵ではない。<sup>(27)</sup>」彼の教育法の基本ともいべき考え方がよく表れている。また、長い歳月をかけて、経験と理論の積み重ねで作り上げられた、とくに貴族階級の教育の良さも、ルソーは十分認めていたこと、そしてそのような教育に、あるいはそのような教育を享受できる環境に対して潜在的な憧れをもっていたこと

もこの言葉からうかがえるのである。

ルソー自身が教育というものを私教育として行うべきなのか、公教育として実施すべきものか、いずれを考えていたのかということが、長い間論議の対象になっていた。<sup>(28)</sup> 教育に関する著作のなかで、『サント・マリのための教育案』、『エミール』、『新エロイーズ』では私教育が、『経済論』では公教育が説かれているからである。ルソーがいずれの教育形態を理想としたかはともかくとして、貴族や富裕な階層が社会の中心であった当時の状態を考えれば、私教育の対象は当然そのような階層でなければならなかった。少年時代の、あの陰惨な徒弟奉公の経験は、反動的に、その時の楽しかった田園生活への憧憬とともに、常に「あの繊細な感覚、あの道徳的感覚」を持つ上流階級の生活に対する根強い賛美としてルソーの心のうちに潜在していた。その反面、長い間の闘病生活は明るいルソーの性格のどこかに暗い影を残し、才能があっても身分の上では屈伏しなければならない不条理と悔しさ、その裏返しの劣等感などの屈折した感情も加わって、自然の情操をまったく抑圧してしまっていると思えるような貴族たちの教育の必要性を強調したかったのである。このことは『新エロイーズ』の出版成功の際のルソーの言葉に如実に表れている。「もし、私とその気になったら、上層階級の女でも、征服できないのはまずないくらいだった」「パリでは、純粹で優しく素直な感情を他人のうちに認めると、もう自分にはそれがなくても、まだこれを尊重するのである。今や、腐敗はどこでも同じで、もはやヨーロッパには美風も徳も存在しない。だが、そうしたもののへの愛がなおわずかながらも存在するとすれば、それはパリにこそ求められるべきである。」<sup>(29)</sup> この昂揚した感情に基づいて、「私の才能は、有益だが手厳しい真実を力づよく、かつ、勇敢に人々に伝えることにあった。」<sup>(30)</sup> という自負心にも支えられてルソーは『エミール』を中心として自然教育論を展開したのであった。

ルソーの教育論の内容についてはすでに多くの研究があるので、ここではそれには深く立ち入らない。しかし、児童の教育論としてきわめて特徴的な内容の成立が、ルソーのどのような人間性に基づくものであるのかは考えておか

なければならない。その特徴のひとつは、精神の教育の基礎として身体の教育と感覚の教育を重要視していることである。ルソーによれば、自然は大人となるまでは子供を子供としておきたいのだから、教育もこの自然の順序に逆らってはならない、未来の幸福のために現在の幸福を犠牲にしてはならない。そして幼年時代においてもその人間としての固有の完成と成熟があるのである。その具体的な教育目標として、とくに5才から12才までの間は、感覚器官の成熟にあわせてその訓練に重点をおき、知能教育は、読み書き、絵画、幾何程度にとどめるといのである。<sup>(31)</sup> 一般に教育は自己の体験に基いて論理構成され、実施される性格をもっている。この観点からいうならば、『エミール』における幼児教育の在り方はルソー自身の経験からかなり離れているように思われる。ルソーは6才の頃から父とロマンを読みはじめ、7才にはあらかたの歴史や伝記を読み上げていた。しかし、『エミール』では15才までにたった一冊『ロビンソン・クルーソー』を読ませるだけにして、読書をさせてはならぬことを繰り返し強調しているのである。何故なのであろうか。これまで述べてきたように、ルソーは自分自身の性格をよく把握していた。そして繊細で、情熱的感情の強い自分をだれよりも愛していながら、同時に「正しいと思ったことには、私は強情である」という妥協しない自尊心の強さが人と反発し合う、非寛容な態度につながることもよく知っていた。彼は晩年には誤解もあって多くの親しい友人を失った。その原因が己にもあることを知りながら、かえって意固地になって自分の方から離れてしまう、自分の厭な性格にも悩んでいたに違いない。そして、そのような性格を形づくったのは、自分の幼い頃の読書によると考えたのである。ルソーが読書をはじめたのは、まさしく5、6才の頃であった。「こういう危険な方法で、すらすら読んだり、わかったりする力がついたばかりでなく、人間の情熱について、私の年ごろとしては例外とっていい理解力を得てしまった。まだ実際の事柄がどんなことかまるで知らないくせに、あらゆる感情がもう私にわかっていた。まだ何も理解しないのに、すべてを感じた。」<sup>(32)</sup> ルソーがきわめて早熟で賢明な子供であったとしても、確かにこれは異常ともいふべき素質である。彼自身もこう反省する。「しかし、

こういう情緒は私の理性を一風変わったものとしてしまい、人生について奇妙なロマネスクな考えを抱かせるにいたった。これは経験や反省の力でどうしても強制できないものだった。」さらに当時のあらゆる伝記物語や偉人伝を読破するに及んで、彼の、祖国愛の強い、一方で「束縛や隷属を我慢できぬ、この奔放な自尊心の強い性格」も完成し、「一生を通じて、そういうものが飛び出しては都合の悪い場合に顔を出して」いつもルソーを苦しめたのである。ルソーの児童教育が知性の開発と涵養を中心として構成され、理性が目覚める15才ぐらいまでは実物と経験による消極的教育を主体とする特色を持つのは、この苦い反省にもとづいていることは間違いない。

いずれにしても、ルソーの自然主義教育は人間の知性、ルソーの言葉でいえば自己愛の本能、を信じそれを適正な方向に誘導しようとする性善説的な考えであるといえる。この考え方は現代教育の基本であるし、第二次世界大戦以前の日本の教育の原点とも言える朱子学者貝原益軒の教育思想<sup>(33)</sup>とも軌を一にしている。しかし、自然環境、社会環境が急速に変化しつつある現代では、人間はかつての素朴な「野性の人」としての本能を失い、「野蛮人」としての特徴を伸長させていく危険性がある。人間を性悪なものとしての新たな自然主義教育論の確立も必要なのである。

さて、それにしてもルソーの教育を実施したらどのような人間が出来るのであろうか。果たして「エミール」が出現するのであろうか。ここに一つの例がある。フランソワ・マジャンディである。彼は1783年10月6日、ボルドーに生まれ、1831年コレージュ・ド・フランスの生理学教授となる。脊髄神経の前根が運動、後根が感覚をつかさどるという「ベルーマジャンディの法則」を発見した有能な学者であった。マジャンディの父アントワヌ・マジャンディも外科医であったが、ルソーの強烈な支持者でその子供たちは「エミール」のように育てられたという。マジャンディは10才になるまで学校へも行かず、読み書きも習わなかった。だが10才で小学校へ入るとあっという間に他の人に勉強が追い付き、14才で人間の権利についてのフランス国家の論文コンテストで大賞を受賞するまでになった。1803年、医学生となり、1807年には医学校の

解剖学助手になり、1808年パリで医学の学位を受けた。このようにマジャンディはきわめてユニークな教育を受けた結果、医学の分野ですばらしい業績を上げることが出来たといえるが、同時に自分以外の人を軽蔑し、気難しく、傲慢で異常なほど残酷な人間になったという。<sup>(34)</sup> ルソーの教育論にもとづく教育の実践からすべて、マジャンディが生まれるとは限らないが、理想と現実との間にひとつの乖離があることは確かであろう。ルソー自身アンガールと言う人に「あなたの息子を『エミール』に従って育てたとすれば、それはあなたにとっても、息子にとっても、気の毒なことだ」といったという。<sup>(35)</sup> 彼の教育論の実践にはなによりも「良きひとを選びて、早くそのこにつくべし、あしき人に、なれそむべからず」<sup>(36)</sup> ということを法とすることが肝要なのである。「教育は人なり」ということをルソーの人間性は如実に示しているのである。

#### ＜註＞

- (1) ジャン＝ジャック・ルソー『告白』1-1
- (2) Davidson Thomas: *Rousseau and education according to nature.*
- (3) 桑原武夫『ルソー研究』
- (4) 『告白』8-215
- (5) " 8-224
- (6) " 11-347
- (7) R.Laforgue: *Etude sur Jean-Jacque Rousseau*, Revue française de psychanalyse
- (8) "
- (9) 『告白』2-32
- (10) " 1-13
- (11) V.Domole: *Analyse psychiatrique des "Confessions" de Jean-Jacques Rousseau*
- (12) R.Laforgue: *Etude sur Jean-Jacque Rousseau*, Revue française de psychanalyse
- (13) 宮ヶ谷徳三『臨床と批評』—ルソーの精神分析的研究への覚え書
- (14) 『告白』6-142

- (15) 『告白』 8-226
- (16) " 6-145
- (17) " 6-154
- (18) " 6-160
- (19) " 6-256
- (20) 『新エロイーズ』 148
- (21) 桑原武夫, 樋口謹一 他『ルソー研究』人間ルソーの項
- (22) 『告白』 7-119
- (23) 『新エロイーズ』 4-363
- (24) 『人間不平等起源論』 159
- (25) 『エミール』 II. 1-167
- (26) 『告白』 6-166
- (27) " 6-148
- (28) 『ルソー研究』
- (29) " 11-346
- (30) " 11-351
- (31) 『エミール』 II
- (32) " 1-8
- (33) 『和俗童子訓』
- (34) 渋谷章『かがくあさひ』 52-4, 1992.
- (35) 桑原武夫『ルソー研究』
- (36) 貝原益軒『和俗童子訓』